

七組 5場面の読み取り

「僕」は、ちようを盗んだときは、大きな満足感でいっぱい、誰にも見つからないように帰ろうとすると、女中に会ってしまい、とにかく盗んだことを見つかりたくなくてちようをポケットに隠してしまった。その後、「僕」はもとの状態に戻しておけば見つからないだろうと思、エーミールの部屋に行つてちようを出してみると、バラバラになっていた。「僕」は、何よりも自分でつぶしてしまったことを悔やんだ。

坪井美澄

「僕」は熱烈にほしがっていたちようを手に入れた満足していた。しかし、現実にはエーミールのちようを盗んでいるだけだ。そして、人に見つからないかと思、ちようをポケットに突っ込んでしまう。自分を守りたい気持ちがある中で強出してしまった。そして、ちようを返しに行つたが、ちようがつぶれてしまった。そんなちようを見ると、盗みをしたという気持ちなど一気に吹き飛んで、ちようをつぶしてしまったことを何よりも悔やんだ。

長野修平

「僕」はエーミールの部屋から、エーミールの気持ちも考えず、自分の気持ちを優先して、ちようを持ち出した。しかし、そのちようを、エーミールの物だとか、ちようを大切にすることも忘れ、自分を守ることになった。「僕」は、ポケットにちようを持った右手を入れた。しかし、家の入り口の前で、これはまずいと思つた。「僕」は、エーミールの部屋に戻つたが、その時にはもうちようは壊れていて、それを見た「僕」は盗まなければよかつたと悔やんだ。

植木伯臣

「僕」は、自分の欲望に身を任せて、罪の意識があつたにもかかわらず、エーミールのクジャクヤママユを盗んでしまった。しかし、下の方から誰かが上がってくるのが聞こえたときに、「僕」の良心は目覚める。そして、自分を守ろうとして本能的にちようを隠していた手をポケットに突っ込み、家の入口まで来るのだが、盗みをしたということを知られたくないがためにまたエーミールの部屋に戻ってくる。だが、気づいたときにはもう遅く、ちようを壊してしまつていた。「僕」は悔やむのだが、悔やみきれないほどに悲しみにうちひしがれていた。

満仲安紀

「僕」はちようを盗んだことについて、大満足としか感じなかつた。しかし、それは表側だけ。裏側には罪の意識が会つての行動だつたのだ。盗みが見つかり公になることを恐れた「僕」は、自分を守るため、ポケットにつっこみ、入り口に向かつた。だが、ついた途端、見つかることを極度に恐れた「僕」は、急いでエーミールの部屋に返さうと思つた。見つかりたくないと思つた、机の上にはちようを置いたとき、ちようを壊してしまつたことを初めて知つた。ちようよりも自分を守ろうとしてしまつたことを何よりも悔やんだ。

大久保咲良

「僕」はクジャクヤママユをなんとしても手に入れたという欲望に負け、エーミールが捕らえたクジャクヤママユを盗んでしまった。最初は大きな満足感しかなかったが、女中とすれ違い、恐怖におびえ、とっさにクジャクヤママユを本能的にポケットに突っ込んでしまつた。「僕」は、クジャクヤママユを元の場所に戻しに行こうとしたが、クジャクヤママユはぼろぼろになつていて、「僕」は、クジャクヤママユを壊してしまい、大変悔やんだ。

岩田美咲

「僕」は、悪いと分かっているながら、欲望に飲まれ、罪を犯した。その時「僕」は、満足感の他に罪の意識も感じていて、ばれないように右手に隠しながら階段を下りた。しかし、女中が来たとき、思わず大切なちようをポケットに突っ込んだ。ただ怖くて、自分を守りたくてした行動だつた。しかしすぐに、このままではばれると思、引き返した。自分を見る周りの目が変わるのが怖くて、何もしなかつたことにしようとした。しかし、ちようはつぶれていた。その時「僕」は、自分があるなにかが悔やみ、ひどく心を痛めた。

磯野菜々加

ふくれあがる欲望に負けた「僕」は、満足感を味わっていたものの、心の片隅には罪悪感があつた。しかし、人の心配がし、極度の恐怖に襲われ、衝動的に、盗んだちようをポケットの中に突っ込んだ。ちようのことを忘れ、自分を守ろうとした。「僕」がちようを返そうとポケットから出した瞬間、夢だと思つた。自分を守りたいがために、自分の手によつて、珍しいちようをつぶしたことを、ひどく悔やんだ。そして、「僕」は、欲望と罪に支配されていくことで、顔が真っ青になつた。

内木希美

「僕」はほしくてたまらないクジャクヤママユを手にして、大きな満足感を得たけど、下から人の声がしたとき、焦り始めた。しかし、クジャクヤママユよりも自分を守ろうとして、ポケットに突っ込んでしまつた。入り口まで来たのはいいものの、クジャクヤママユを戻そうと、またエーミールの部屋に行つたけど、すでに遅く、クジャクヤママユはバラバラになつていて、こんなことをしてしまつた自分をとつともなく悔やんだ。

岩田 悠